ふるさと御所 文化財探訪

⌘其の三十一⌘

古墳時代〈19〉
葛城氏の盛衰（8）
葛城氏と河内政権①

文化財課
☎62-9872

図１　百舌鳥古墳群の空中写真
（掲載許可：堺市博物館）

ここで話題を、８月号に記した命題のうち、今まで触れることができなかったことに戻したいと思います。それは、葛城襲津彦の墓とも目される室宮山古墳は、５世紀前葉にあっては奈良県最大という破格の規模を有する古墳でありながら、なぜ何の前触れもなく、前期古墳が稀薄な南葛城の地に突然出現するのか、ということです。

この時期、天皇陵古墳（大王墓）の所在が佐紀盾列古墳群（奈良市）から、百舌鳥古墳群（仁徳陵古墳など：堺市）（**図１**）または古市古墳群（応神陵古墳など：羽曳野市・藤井寺市）に移ることについて、天皇の系統が替わり、河内政権が成立したと見る立場（以下、肯定論）があります。しかし一方で、これはただ単に陵墓の所在地が変わっただけで、天皇の系統が変わったわけではないとする立場（以下、否定論）もあります。

この問題は、室宮山古墳ひいては葛城氏の出現の経緯を考える上で避けて通ることのできないものです。そこで、数話にわたって私なりの考えを述べたいと思います。

さて、この問題については多くの研究者により議論されてきましたが、右記した天皇陵古墳の所在地の変化に代表されるように、中央の状況のみ見ていると、同じ事象でありながら、いかようにも解釈が可能となると思っています。

そこで私は地方の状況に着目しました。**図２**は５世紀代の鉄製甲冑（中期型甲冑）の装着状況で、うち上から冑・頸甲・短甲が主要な武具となります。また、**図３**の表には地方所在の５世紀中葉までの甲冑出土古墳のうち、中小規模の古墳を抽出しまとめてあります。

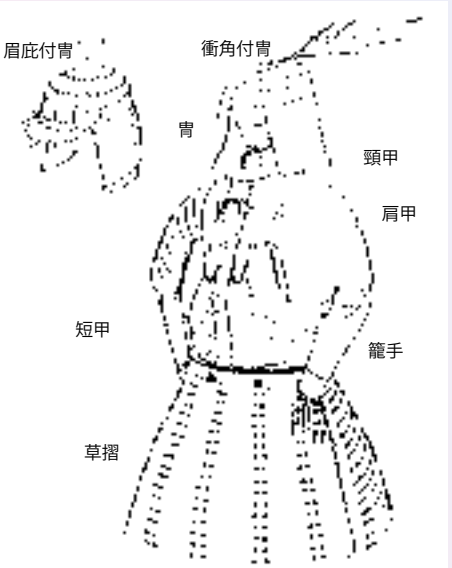

図２　中期型甲冑の装着状況
（末永雅雄『日本上代の甲冑』から、一部改変）

この表から分かるのは、前期から続く伝統勢力（緑塗り）は前期以来の竪穴式石室や粘土槨またはそれを略した埋葬主体を採用し、そこには頸甲・短甲はあっても冑は副葬されないことです。対して中期に入って新興する勢力（黄塗り）は地下式横穴墓や舟形石棺などそれぞれの地域ならではの地方色豊かな埋葬主体を採用し、そこでは冑・頸甲・短甲がセットで副葬されていることです。

これは非常に奇妙な事態といえます。ヤマト政権としては、前期以来の勢力を使って地方を経営した方が楽で無駄もないはずです。ところが事実は異なり、新興勢力の方にセットの甲冑を与えて篤く待遇し、逆に伝統勢力に対しては冑を与えずに冷遇しているのです。

これは５世紀のヤマト政権は、新興勢力に対しては懐柔策、伝統勢力に対しては牽制策で対応したことを示しています。このように前期のヤマト政権と矛盾した政策を、あえて中期の政権が採用していることは、両者の間に系統の違いがあることを示す有力な証拠であると考えています。

（次号に続く）。

【参考文献】拙著『古墳時代の王権と軍事』、２００６年、学生社

（文責　藤田　和尊）

性格	県名	古墳名	主体部	冑	頸甲	短甲
伝統勢力	山口	天神山1号墳	竪穴式石室	なし	あり	あり
	岡山	月の輪古墳	粘土槨	なし	あり	あり
	和歌山	寺内63号墳	粘土槨	なし	あり	あり
	岐阜	長良龍門寺1号墳	粘土槨	なし	あり	あり
	新潟	谷内21号墳	割竹形木棺直葬	なし	あり	あり
新興勢力	宮崎	木脇塚原Ａ号墳	地下式横穴	あり	あり	あり
	徳島	恵解山2号墳	箱形石棺	あり	あり	あり
	山口	赤妻古墳	舟形石棺	あり	あり	あり
	静岡	千人塚古墳第2主体	木棺直葬	あり	あり	あり
	静岡	五ケ山Ｂ2号墳	木棺直葬	あり	あり	あり

図３　中期中葉までの地方における甲冑出土中小規模墳の２類型

★公共の場等では禁煙・分煙の徹底を★　子どもたちや妊婦、非喫煙者等を受動喫煙の被害から守ろう！